

『更級日記』〈夢〉の解析

— 前生夢の機構 —

久保朝孝

『更級日記』には〈夢〉に関する記事が十一例あるが、その大半は信仰に関するものである。その中には、最後にあらわれる阿弥陀来迎の夢のように、作者の往生願の確信と作品構想の基軸としての信仰史的到達をはっきりと読み取れるような記事もあるが、その夢の記述がどのような意味を持ち、どのような機能を付与されているのかが不分明なものも少なくない。本稿では、その中から作者の前生が告知される夢をとりあげ、右の点についていささか考察を試みることにする。なお、その場合、「夢は無意識からの警告である」⁽¹⁾としても、それを記述する主体は極めて意識的であることは自明のことであって、執筆時における意識を探る試みが同時に行われなければならないまい。

1

ひじりなどすら、前の世のこと夢に見るは、いとかたかなるを、いとかう、あとはかないやうに、はかくしからぬ心地に、夢に

見るやう、清水の礼堂にゐたれば、別当とおぼしき人いで来て、

「(a)そこは前の生に、この御寺の僧にてなむありし。(b)仏師にて、

仏をいとおほく造りたてまつりし功德によりて、(c)ありし素姓ま

さりて、(d)人と生まれたるなり。この御堂の東におはする丈

六の仏は、その造りたりしなり。(3)箔をおしさて(1)なくなり

にしぞ」と。「あないみじ。さは、あれに箔おしたてまつらむ」

といへば、「なくなりにはしかば、こと人箔おしたてまつりて、(2)

こと人供養もしてし」と見てのち、清水にねむごろにまゐりつ

かうまつらましかば、前の世にその御寺に仏念じ申しけむ力に、

おのづからようもやあらまし。いといふかひなく、詣でつかうま

つることもなくてやみにき。 △三十二歳

右引用は、十一例中第六の夢を含む一段である。この〈夢〉の中で、まず清水寺の別当と思われる僧による次の告知がなされる。

(a) 作者の前生が清水寺の僧であったこと。

(b) 仏師としての造仏の功德を積んだこと。それにより、

(1)

(c) 「ありし素姓まさりて」、

(d) 今生に人と生まれたこと。

ここでまず不審なのは、作者が(c)「ありし素姓まさりて」(d)「人と生まれた」という点である。この部分、「(前世で)あった素姓よりまさって、(家柄の良い)人と生まれているのです」と一般に解釈されるが、例えば同時代の大仏師定朝は「仏師僧綱始之」とは言え、治安二年(1022)法成寺造仏の功により法橋(律師相当、五位に準じる)位に叙され、また永承三年(1048)興福寺造仏の功により法眼(僧都相当、四位に準じる)位に叙されていて、仏師の社会的地位の向上は當代特に目を見張るものがあった。定朝と等しく比較することはできないにしても、仏師の素姓が従四位上上総介常陸介菅原孝標の娘と比較して大きく劣るとは、俄には思われぬ。また、(良き家柄)が「菅原」家をさすという読みは、文脈上些かの無理なしとしない。

これに関連して次に、今生に女人として生を受けたことの不可思議がある。

女身は垢穢にして、これ法器に非ず。云何んぞ能く、無上菩提を得ん。(中略)又、女人の身には、猶、五つの障あり。一には梵天王と作ることを得ず、二には帝釈、三には魔王、四には転輪聖王、五には仏身なり。云何んぞ、女身、速かに成仏することを得ん。(『法華経』巻第五「提婆達多品」第十二)

慶滋保胤の『日本往生極楽記』(寛和元年(985)以前成立)には、四十二伝四十五人の往生の有様をおさめるが、そのうち比丘尼三人、優婆夷七人の計十人が女人であって、女人往生は可能と信じられてい

たようであるが、経典によれば、これは「龍女成仏」に見られるように「変成男子」を経ずしては不可能なことであった。女身として今生に生を受けることは、極楽往生願にとっては不可能ならずとも極めて不利であることは言を俟たない。であるにもかかわらず、「ありし素姓まさりて」と言い負せるものであろうか。前世における僧・仏師としてのあまたの功德にもかかわらず、現世に往生から遠く隔てられた女身として転生する無理が見えて来ざるを得ないのである。

では、このような不審・無理をかかえた記述がなぜなされてしまったのであろうか。この点について、次に考えてみたい。

時代はやや下るが、『今昔物語集』には法華経にまつわる靈驗譚をおさめる特定の巻々(第十二・十三・十四)があるが、そのうち巻第十四中には、前生夢(夢告によって前世の因縁を知る)により法華持経をいっそう確固とさせた僧らの話が集中的に収められている。第十二から二十四までの計十三話がそれであって、説話としての基本構造はほぼ全話に共通していて、前生夢説話の型を理解するのに便利であるので、しばらくこれを参考にしたい。なお、その出典はすべて『大日本国法華経験記』に依拠しているので、今、その最も典型的な話を同書により見ることとする。なお、参考として、必要箇所は『今昔物語集』の本文を()により示した。

第八十九 越中国の海蓮法師

沙門海蓮は、越中国の人なり。志は法華の読習にあり。乃至、発心して暗誦し、加行功を積み、即ち序品より誦して、観音品に至るまで、二十五品は、早疾く諷誦して、任運に礙ることなし。

ただ陀羅尼・嚴王・普賢の三品において、これを誦すること能はず。多年の功を運らすといへども、暗誦することを得ず。深く肝胆に銘して、このことを歎き傷みて、立山・白山及び余の靈験に参り向ひて、このことを祈禱せり。難行苦行し、食を断ち塩を断ちて、この三品を誦すれども、総て憶持することを得ず。

即ち夢みらく、一の菩薩の形の人ありて、海蓮に告げて言はく、(A)汝先生において、蟋蟀の身を受けて(汝チ前生ニ蟋蟀ノ身ヲ受テ、僧房の壁に居りき。その房に僧あり、法華経を誦しき。蟋蟀経を聞くに、七の巻一品を誦し畢へけり。休息せむがための故に、壁の上に寄り付くに、蟋蟀頭に当りて、圧し殺され畢へけり。(B)二十五品を聞きたる功德の力に依るが故に(法花ノ二十五品ヲ聞タル功德ニ依テ)、(C)蟋蟀の身を転じて(蟋蟀ノ身ヲ転ジテ)、(D)人界に來り生れ(人ト生レテ)、(E)妙法を誦す(僧ト成テ、法花経ヲ誦ス)。三品を聞かざるが故に、陀羅尼・嚴王・普賢品を誦することを得ず。汝前生を觀じて、今生の報を信じ、一心に精進して、菩提を期すべしといふ。沙門夢覺めて、明かに本縁を知りて、仏道を修行せり。天徳元年に入滅を告げたり。

傍線を付した部分は、いわばヤマ場にあたるが、その構成はほぼ全話に共通するものである。一見直ちに、『更級日記』前生夢の構成との一致が看取される。(A)―(a)・(B)―(b)・(C)―(c)・(D)―(d)の照応は、偶然の所産とは言い難く、明らかに影響・摂取の痕跡と見るべきであろう。上落途次においぞ見聞した「まのてう」の伝説・「武芝寺」の伝説・「在五中将」の故事伝説・「富士川」の伝説などを記す作者の

姿からは、説話に対する並々ならぬ関心を読み取ることができ(6)、第三の夢で、侍従大納言女の猫への転生を記す姿とも合わせて考えると、前生夢に関する説話への関心は、かなり深いものがあつたようである。

『大日本国法華経験記』の成立は長久年間(1040〜1044)と考えられているが、これは孝標女三十三歳から三十七歳にあたり、入手・享受まで多少の時日を要したとしても、三十六、七歳から四十歳ぐらいまでの間には、これに触れる機会が十分にあつたのではないかと考えられる。紫式部がその『日記』の中で阿弥陀仏への信仰を述懐しているのが三十七、八歳の頃と考えられること、そして『更級日記』作者が、「今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ、思ひしりはて、(中略)のちの世までのことをも思はむと思ひはげみて、霜月の二十よ日、石山にまゐる」と、物詣に専心するようになるのが、やはり三十八歳の折であることを考え合わせると、作者がこの書に触れる時機としては極めてふさわしいのではあるまいか。加えて『更級日記』の執筆が作者五十二歳以降のことと考えられるところからすれば、先行前生夢説話から『更級日記』への影響あるいは『更級日記』による摂取の可能性はきわめて大きいと言わねばならない。

これを認めるならば、(c)「ありし素姓まさりて」という記述の不審・無理は、先行前生夢説話の構成を型通りそのまま取り入れたことに起因するものであつたと考えられることにならう。それは、たとえば前引用中の(c)「蟋蟀の身を転じて」から(d)「人界に來り生れ」への展開は、これら前生夢説話のダイナミズムを最もよく支える部分であるが、

今昔物語集 卷第十四	大日本國 法華經談記	(A) 前生の告知	(B) 前生における功德	(C) 前生から今生への 転換	(D) 今生における 人への転生	(E) 法華經読誦
醍醐僧惠増持法花知前 生語第十二	卷上第三十一	汝は二生の人なり。			今人の身を得 て、	法華經を誦す。
入道寛念持法花知前生 語第十三	卷中第七十八	汝先生において、衣魚の身を受け、法華 經の中にありて、三行を食し失ひたりき。	また經の中に住せしに依りて、		今人の身を得 て、	法華經を誦す。
僧行純持法花經知前世 報語第十四	卷中第七十七	汝、先世に黒き馬の形を受け、持經者の許 にありて、時々法華經を聞きたてまつりき。	經を聞きし力に依りて、		今人の身を得 て、	法華經を誦す。
越中国僧海運持法花知 前世報語第十五	卷下第八十九	汝先生において、蟋蟀の身を受けて僧房 の壁に居りき。	二十五品を聞きたる功德の力に依るが故に、	蟋蟀の身を転じて、	人界に來り生 れ、	妙法を誦誦す。
元興寺運尊持法花經知 前世報語第十六	卷中第五十八	汝先世において、小さき犬の身を受けき。	先に法華經を聞くことを得けるに由るが故に、		今人の身を得 て、	また法師と作りて、法花を 持することを得たり。
金峰山僧転乘持法花知 前世語第十七	卷下第九十三	汝先世において、毒蛇の身を受けたりき。	害せむと欲する心を止めて法華を聞きしが故に、	多却輪廻の毒の身を 転じて、	今、人の身を 得て、	法華の持者と作る。
僧明運持法花知前世語 第十八	卷中第八十	その牛は即ち汝なり。	法華經を聞きしに依りて、	畜生の報を離れて、	人界の生を粟 け、	仏法の器と作りて、七卷の 經を誦せり。
備前國盲人知前世持法 花語第十九	卷上第二十七	汝先世に毒蛇の身を得て、信濃國の桑田 寺の乾の角、榎木の中に住しけり。	法華を聴きしに因りて、		今人身を得て、	また仏法に値へり。
僧安勝持法花知前生報 語第二十	卷上第二十六	先身は黒色の牛なりき。	(持經者の辺にありて、常に法華經を聞きき。) この縁に因るが故に、	苦を抜くことを得、	人身を受けて	法華を聞くの力を得たり。
比叡山西塔僧命統誦 法花知前世語第二十一	卷中第五十三	汝が前生の身は、これ耳の垂れたる大き なる狗なりき。	(その狗常に法華經持者の房にありて、昼夜法 華を聞きけり)その善力に因りて、	狗の果報を転じて、	人の身を感じ 得て、	法華經を誦す。
比叡山西塔僧春命統誦 法花知前生語第二十二	卷上第二十五	汝前世に野干の身を受けて、	(西塔の法華堂の裏に住み、天井の上遊びて、 常に妙法及び宝璽を聞きき)その因縁に依りて、		今人身を得、	この山の僧と作りて、法華 經を持せり。
近江國僧頼眞誦法花知 前生語第二十三	卷上第二十四	汝先生の身は、これ鼻の欠けたる牛なりき。	經を負ひたる功德に依りて、	牛の身を離れて、	人間に至り、	法華經を誦し、法文の理を 解して、仏法の器と作りぬ。
比叡山東塔僧朝禪誦法 花知前世語第二十四	卷上第三十六	汝前生に白き馬の身を受けき。	(法華の持經者、その白き馬に乗りて、一時遊 行しけり)その功力に由りて、	白き馬の身を転じて、	人界に生るる ことを感じ、	法華經を誦して、仏法に値 遇せり。

※ 最終話の例は相人の所説であるが、後に夢告によりその正しさが確認される。

『更級』では前・今生ともに「人身」としてしまつたために、やむなくその展開を維持する梃子として、「素姓」という新しい概念を強引に導入したと考えることである。参考のため、『今昔物語集』の各説話に対応する『大日本国法華経験記』各話中の(A)〜(E)に該当する部分を前頁に表示した。なお『更級日記』には(E)に相当する記述は見られないが、その削除は当記事後半部への連接のためにどうしても必要な措置であつたろうし、また当記事末尾の「いといふかひなくて、詣でつかうまつることもなくてやみにき。」に照応する姿勢でもある。前生夢説話の単なるなぞりではない『更級』の独自性が見られる。

2

前節では、『更級日記』前生夢の前半部が前生夢説話を撰取することによって成立したと考えられることについて述べたが、では作者は、その夢を実際には見ていなかったのか、ということがあるいは問題となるかもしれない。しかし、それはほぼ無意味な疑問であるだろう。

高僧が行うごとき自らの夢ノートを作者が記録・所持して、それにもとづいて過去の夢を記述したと考えた場合でも、その記述位相としては少なくとも次の三つの場合が考えられる。一つは夢ノートのままに忠実にすべて記述する場合、もう一つは執筆時に適宜取捨選択を行い、またとりあげたものについても字句の修正程度の改変をする場合、次に執筆時の主題・構想意識によって大幅に改変する場合。そして、それらとは別次元のまったくの虚構の場合がある。

一々の夢がこれらのどの次元・位相にあるかを見極めるのは困難、と言うよりも愚かしいことに違いない。なぜなら、以上の各次元・位相のいずれをもつたぐ共通項が間違いなく存在し、実はそれこそが記述された事ごらの意味・機能を解き明かすたつたひとつの鍵なのだから。執筆時における作者の意識がそれである。意識の基底にあるものの現前化が要請される。記述された内容が事実であれ、非事実であれ、それをどのように記述した作者の意図(主題性と構想性の連環)こそが探られ、求められなければならないだろう。そのような場合において初めて、虚構性の検討が意味を帯びてくる。

『更級日記』冒頭部の虚構性について論じた大養廉の所説は、そのような意味で特に印象深いものであった。

彼女にとつて、身の幸は浮舟に較ぶべくもなかった。だからこそ、この日記の冒頭には「あづまぢの道の果て」(常陸)「よりもなほ奥つ方」と浮舟より更に奥深い地の果てが設定され、「いかばかりかはあやしかりけむを」と自卑の言葉で弁ぜられているのであろう。常陸帯の一首を引きながら、漠たる東國の涯から自己を登場させた冒頭の虚構はそのように理解して置きたい。

(傍点久保)

『更級日記』は物語的に始発する。「この虚構は自己を浮舟的に登場させる物語的技法ではなかったのか」とする右大養廉の方法意識は冒頭部のみに限定されることなく、作品全体にまでその適用範囲を広げ得る価値を有するものであろう。『更級日記』のすべての記述は、虚構の尺度による再測量が要請される。

ここで前生夢後半部の考察に移る。まず作者の前生である仏師が造った「丈六の仏」のことが語られるが、『更級日記』中「丈六の仏」なる語は、上総からの上洛記の終わり、入京直前の場面のみに見られるものである。

栗津にとどまりて、師走の二日京に入る。暗くいき着くべくと、申の時ばかりに立ちて行けば、関ちかくなりて、山づらにかりそめなるきりかけといふ物したる上より、丈六の仏のいまだあらづくりにおはするが、顔ばかり見やられたり。あはれに、人離れて、いづこともなくしておはする仏かなと、うち見やりて過ぎぬ。こゝらの国々を過ぎぬるに、駿河の清見が関と、逢坂の関とばかりはなかりけり。

△十三歳▽

上洛途次の印象深い景として清見が関と並べてあげられているが、逢坂の関の印象を形成した重要な要因として、この「丈六の仏」(『関寺縁起』によれば、再興された関寺の本尊は弥勒仏で、実際の高さは五丈という)の存在があったようである。この仏像のことは作品中にもう一度記述されている。

……霜月の二十よ日、石山にまゐる。雪うち降りつゝ、道のほどさへをかしきに、逢坂の関を見るにも、むかし越えしも冬ぞかしと思ひ出でらるゝに、そのほどもいと荒う吹いたり。

逢坂の関のせき風吹く声はむかし聞きしにかはらざりけり

関寺のいかめしうつくられたるを見るにも、そのをり荒造りの御顔ばかり見られしをり思ひ出でられて、月日のすぎにけるもいとあはれなり。

△三十八歳▽

「そのをり荒造りの御顔ばかり見られしをり思ひ出でられて」という記述からは、かつて上洛の折に見た未完の丈六仏(五丈がなぜ丈六(二丈六尺)とされているかについては、虚構性の問題として別に論じる予定である)の印象がきわめて深いものであったことが窺える。そして、関寺の丈六仏に関するこの二つの記事が、前者は上洛の旅の終わりに、後者は石山寺を開始とする物詣行の初めに置かれていることは注目すべきことであるが、これも別稿にゆずることにしたい。

関寺は、中古廃絶に帰していたものを、源信の発意、延鏡の尽力によって再興し、大仏師康尚(定朝の父)により造立された純金五丈の弥勒仏を安置したという。『関寺縁起』『左経記』『扶桑略記』等により関係略年表を次に示す。

寛仁元	1017	・六月十日、源信示寂(七十六歳)
二	1018	・閏四月二十四日、仏像執刀 ・五月二十一日、仏像竣功
四	1020	・十二月二日、孝標女初めて「丈六の仏」を見る(十三歳)
治安元	1021	・七月九日、伽藍造営

二十
1022

・八月十九日、半ば功を終え、仏像を加蓋に安置
・延鏡、広く道俗から喜捨を募る

万寿二
1025

・五月十六日、道長靈牛に参詣
・六月二日、靈牛死す

四
1027

・仏像供養

寛徳二
1045

・孝標女、再び関寺を通る△三十八歳▽

ところで、関寺の再興にまつわる説話が、やはり『今昔物語集』に見えるので、その後半部をそのまま引用する。なお、省略する前半部は、困難を極めた関寺再興事業の途中、迦葉仏の化身との夢告を受けた靈牛があらわれて寺の建立を助けたという内容で、歴史的事実としては確認されているが、説話としてはきわめて類型的なものである。

此ノ寺ノ仏ハ弥勒ニ坐マス。而ルニ、其ノ仏堂共モ壊レ、仏モ朽チ失セ給ヒニケレバ、人、「昔ノ関寺ノ跡」ナド云テ、礎許ヲ見テ、知リタル人モ有リ、不知ヌ人モ有ルニ、横川ノ源信僧都ノ、「此レ、何デ本ノ始クニ造リ立テム。止事無キ仏ノ、跡形モ無クテ坐スルガ極テ悲キ也。就中ニ、如此ク関ノ畢ニ坐スル仏ナレバ、諸ノ国ノ人不礼ヌ無シ。『仏ニ向奉テ暫クモ首ヲ低タル人ソラ、

必ズ仏ニ可成キ縁有リ。何況ヤ、掌ヲ合セテ一念ノ心ヲ発シテ礼ム人ハ、必ズ、当来ノ弥勒ノ世ニ可生シ」ト釈迦仏説キ置キ給ヘル事ナレバ、仏ノ御法ヲ信ゼム人、此レヲ可疑キニ非ズ。然レバ、此レ、至要ノ事也」ト思給テ、横川ニ□□ト云テ道心有ル聖人有リ、(一)僧都、其ノ人ニ語ヒ付テ、知識ヲ令引テ仏ヲ造ルニ、漸ク仏形ニ彫ミ奉ル間ニ、源信僧都失セ給ヌレバ、此ノ□□聖人、「故僧都ノ宣ヒ置シ事ナレバ、愚ニ可思キニ非ズ」ト云テ、(二)仏師好常ヲ勸ニ語テ令造奉タル也。

堂ハ僧都ノ遺言ノ如ク、二階ニ造テ、上ノ階ヨリ仏ノ御兒ハ見エ給ヘバ、諸ノ通ル人、吉ク礼ミ奉ル。堂漸ク造リ奉ルニ、材木墓々シク不出来ズ。(三)仏ニ薄不押畢ズ。此ノ牛仏礼ミニ来ル諸ノ人、皆、物ヲ具シテ奉ル。此レヲ取り集メテ、思ヒノ如ク堂并ニ大門ヲ造リツ。猶残レル物ヲ以テハ僧房ヲ造リツ。其レニ猶物余タレバ、供養ヲ儲テ大キニ法会ヲ行ヒツ。其ノ後ハ、壊ルレバ知識ヲ引テ修理ヲ加フ。

(後略)

関寺再興の経緯を語る本話中、注意すべきは、(一)関寺再興・本尊造仏の発願者である源信、つまり最重要人物が仏像完成前に亡くなつていたこと、(二)その後をうけて別人(好常(康尙))が仏像を完成させたこと、(三)物資の不足のため仏像に箔を押し終えることができないでいること、の三点であつて、これらは『更級日記』の前半部後半部の傍線部(1)・(2)・(3)にそのまま照応するものである。各照応は細部における状況等の相違はあつても、全体としてはきわめて類似性を持った

ものである。ここでも、また説話の摂取が行われていると言えるのではないだろうか。作者の脳裡に、丈六の仏僧・関寺の大仏僧・関寺の再興・再興にまつわる逸話、という連想が働いたかどうかは知るよしもないが、『更級日記』の前生夢後半部が、『今昔物語集』所収説話を摂取して成り立っている可能性は相当に高いと考えざるを得ないのである。(この言い方は正確でないかもしれない。両作品の成立時期を考えれば、両作品同士の直接の交渉は無理。『古本説話集』にも同文的同話を収める本話の直接の典拠は不明とされているが、敢て言えば、本話の典拠となった散佚説話から『更級日記』が直接摂取したと言っべきか。あるいはまた、本件は都人の間でも有名な出来事であったことから、口承段階からの摂取とも考えられる。)

4

以上見てきたように、『更級日記』前生夢前・後半部各々は、それぞれに別種の説話を摂取し、さらにそれらがつなぎ合わされて、一つの夢として構成されている可能性が大きいのである。それでは、そのように摂取・構成した作者の意図、あるいは表現としての機能はどのようなものであったのだろうか。

前半部は、先に見たような無理・矛盾をかかえながらも、約言するならば自らの前生が仏師であったことを語るものである。これは仏道へのよき宿縁を意味する。それは、「ひじりなどすら、前の世のこと夢に見るは、いとかたかなるを、(中略)夢に見るやう、」という記述

と同じ意図によるものであろう。そして後半部は、その仏師としての仕事が無事に終わったことを語るのである。前半部が摂取した説話群は、その登場者の大半が法華持経者としての不完全性あるいは異常を負っている(それゆえに、宿因の夢告を祈請する)。法華経の一部暗誦不能・盲目・色黒・吃等々。今、それが思い合わせられる。

この「未完」性こそが、前・後半をつないだ当夢の主題を担うものであったのではないだろうか。「清水寺(関寺再興説話に清水の僧が登場する)の御堂」の「東におはする丈六の仏」と提示されながらも、実はそこで想起されているのは関寺の五丈の弥勒仏であり、それは竣功後も十年近く、金箔を押しさしたままで、入魂の儀式も済まされていない、中途半端な姿のままにさらし続けられる仏像の面影であった。作者はここで、よき宿縁を受けながらも仏道に対して堅固な姿勢を保てないでいるこの頃の自己の信仰史的状况を、中途半端なものとして、その不安定で落ち着かない、言わば宙ぶらりんの心象を、関寺の未完の大仏の姿に重ね合わせることによって、暗示的に象徴しようとしたのではなかっただろうか。前生において「箔をおしさしてなくなりし」仏師の姿は、そのまま今生において「あとはかないやうに、はかしくしからぬ心地」のままに揺蕩する自身の姿として、ここに位置させられていると考えたい。そこには、自己のかつての心的現実に対する正確な認識が見られるのである。

前生夢を中心に、その前後の作者の信仰の様相を、夢及び述懐的記述に沿ってながめてみるならば、以前は、

(1)「このころの世の人は十七八よりこそ経よみ、おこなひもすれ、

なること思ひかけられず」

△十九歳▽

(四)「(清水参籠の折の夢) かくなむ見えつるとも語らず、心にも思ひとどめでまかでぬ」

△二十六～二十八歳▽

(五)「(初瀬への代参僧の夢) いかに見えけるぞとだに、耳もとどめず」

△同▽

と、仏道・自己の将来に対してまったく無関心な様として記されているのであるが、

(二) 当例

△三十二歳▽

(六)「あなもの狂ほし、いかによしなかりける心なりと思ひしみはてて、まめくしく過ぐすとならば、さてもありはてず」△三十三歳▽
のように、心のうちに道心を起こすが行動に未だ結実しない段階を経

て、
(七)「のちの世までのことをも思はむと思ひはげみて、霜月の二十
よ日、石山にまゐる」

△三十八歳▽

(八)「(石山参籠の折の夢) よきことならむかしと思ひて、をこな
ひ明かす」

△同▽

に見るように、信仰心と行動が相乗的に高まる時期を迎えるように配列されているのである。そのような流れの中で、前生夢を記す(二)及び(六)の記事は無関心と専念との架橋的位置に置かれ、そしてそのどちらにも属さない、一種不安定な時期であったことを示している。この点からも、右に見た解釈が裏付けられるのではないかと思われる。

本稿においては前生夢記事のみをとりあげたが、『更級日記』中にその意味・機能の未だ不分明な「夢」記事は少なくない。続稿におい

て、さらに検討・考察を試みたいと思う。

注

(1) 松本寧至「更級日記・夢と信仰」国文学(昭和56・1)。
(2) 池田利夫訳注「更級日記」旺文社文庫(昭和53・4)現代語訳による。

(3) 平林盛得・小池一行編『僧歴綜覧』笠間書院(昭和51・7)。

(4) 坂本幸男・岩本裕校注『法華経(中)』岩波文庫(昭和51・11改版)書き下し文。

(5) 『法華経』提婆達多品(岩波文庫)

女の言わく、汝の神力をもって、わが成仏を見よ、またこれよりも速ならんと。当時の衆会は、皆、童女の、忽然の間に變じて男子と成り、菩薩の行を具して、すなわち、南方の無垢世界に往き、宝蓮華に坐して、等正覚を成じ、三十二相・八十種好ありて、普く十方の一切衆生のために、妙法を演説するを見たり。(書き下し文)

『大無量寿経』阿弥陀の四十八願中第三十五願(岩波文庫『浄土三部経(上)』)

たとい、われ仏となるをえんとき、十方の無量・不可思議の諸仏世界に、それ、女人ありて、わが名字を聞きて、歡喜信樂し、菩提心を發し、女身を厭惡せん。(その人) 寿終りてのち、また女像とならば、正覚を取らじ。(書き下し文)

(6) 津本信博「更級日記の研究」早稲田大学出版部(昭和57・7)。

(7) 「のちの世までのこと」を一般に「(死んだ) 後の世のことまで」(後世の安樂を願おうとする心境) △旺文社文庫▽と解するが、それならば本文は「のちの世のことまで」でなくてはならない。語順に忠実に解するならば、例えば「後の世の極樂往生までのこと」(今井卓爾

